シリーズ
虹色のひろば

ハノイ日本語訓練センターでのボランティア

船橋　聖一

私は高校教師退職後、新潟県松之山で棚田の米作りを手伝っているが、冬場の農閑期に縁あってベトナムで日本語を教えることになった。

日本語訓練センターの学生たち

ハノイ中心部から約 10 ㎞ほど離れた郊外の住宅地、300m四方が塀で囲まれていて、3 か所の出入り口で外の賑やかな一本の通りと接している。その中に 30 階建ての高層アパート 6 棟、個人住宅、小さなホテル、商店や飲食店、私がボランティアした日本語訓練センターがある。私は小さなホテルの 5 階で 6、7 日間滞在した。センターまでは 50m。

私を派遣した伊勢崎のベトナム人受け入れ会社がビザの手続きをして飛行機代を負担し、日本語訓練センターがホテル代と日々の食事を提供してくれた。

学生たち（約 70 人）は 18 歳から 32 歳で、ほとんどが技能実習生として 3 年間日本で働く予定の者たちだが、わずかに留学目的の者もいる。技能実習生を希望する者はまず日本企業の担当者と丸暗記の日本語で挨拶だけの面接を受け、採用予定となってからセンターで日本語の学習をはじめる。ビザが出るまでの期間が会社によってまちまちで、学習をはじめてから一か月で日本に向かう者もいれば、半年経ってもビザが出ない者もいる。沖縄の空港で働く予定だといっていた 2 人の女性は約 4 か月学んだが、ついにビザが出ずに故郷へ帰った。

センターは全寮制で二段ベッドが置かれた狭い部屋がいくつかあり、10 人から 12 人が暮らす。朝 5:30～夜 10：00 まで体操、掃除、日本語の授業が 6 コマ、朝と夜の自習がある。私は夜行くところもないので 19：30～21：30 まで日本語の学習が少し進んだクラスの自習（10 人）につき合って、学生たちと交流した。彼らの隣に座ってベトナム語の入門書の短い文を読んでもらって私が発音する。その発音を嬉しそうに直してくれた。4 か月から 6 か月が平均的な学習期間で普通の学力でまじめに学習すれば日本語の日常会話ができるようになる。漢字の学習はわずかなので、ひらがなカタカナの読み書きはできるようになる。

学生たちは近くの屋台や食堂で三食をとる。センターの目の前にバラックづくりのサンベオという食堂があった。サンは「朝」、ベオは「太っている」という意味だ。そこの定食はごはん山盛りで 2 万ドン＝100 円だった。私はしばしばそこでお茶を無料でごちそうになった。最初に「いくら」と聞いたら若い店のおかあさんが「50 万ドン」と言って笑った。50 万ドンはベトナムでもっとも高額の紙幣（といってもオーストラリアで作ったプラスチック製）である。他の通りの屋台でお茶を飲むと 3 千ドン＝15 円だった。

5 人の女性教師は

先生は 5 人で 26 歳から 32 歳までの女性、3 人は技能実習生として 3 年間日本で働き、帰国してからセンターの日本語教員になった。米子の魚工場、愛知の菊栽培農家、広島のキノコ工場。ひとりは大阪に留学した。もうひとりの Nhung さんは日本に行ったことはないが外国語大学を卒業してＮ1 （日本語検定の最高ランク）を持っている。会話も読み書きも自在である。

米子の魚工場で働いた Hoa さんはセンターに住んで学生たちの管理も担当している。5：30～22：00 までの仕事である。給料は 1 千万ドン＝5 万円だと言っていた。あるとき

ココナッツの木に裸足で登り、落とした実を拾ってナタで上手に処理するので「あなたは何でもできるね」と言うと、「でも結婚だけはできないの」とケラケラと笑った。

言葉はリズム

私は 1 日に 3 コマ程度の授業を担当した。8 人から 15 人ぐらいのクラス 4 つに出た。私が例文を読んで後について発音してもらって、それを直すのが役割だ。「来週の日曜日にいっしょにお茶をのみにいきませんか」という例文を読むと、彼らは「らいしゅう　の　にちようび　に　いっしょ　に　おちゃ　をのみ　に　いきませんか」と助詞を独立させて読んでしまう。「らいしゅうの」と助詞をくっつけて弱く発音するように話し、テキストを閉じさせて耳で聞かせながら、私がリズムを刻んで読んだ。そのリズムに乗れると少し日本語らしくなる。音楽のような例文読みや、会話の授業を面白がっていた。ベトナム語にも文の区切りがあり、リズムがあるのだが、それは何度も声に出さないと身につかない。身につかないとそのリズムが聞こえてこない。私にとって女の先生たちのきれいな声の会話は、リズムのない音の流れだ。でも彼女たちの表情と口元を見ながらそれを聞くのは楽しい。

週末のミニ旅行で

週末はほとんどの学生が帰省する。配偶者や子供のいる学生もいる。10 月 28 日の最初の週末、私はどこにも行けないので、帰省しないで私につき合ってくれる学生がいないか探してもらった。28 歳のドンがバイクで市内へ連れて行ってくれた。彼は貧しいので毎日の夕方と土日にバイクタクシーの仕事をしている。1 日仕事すると 30 万～40 万ドンだという。バイクや車であふれる道路、信号のない道路をすり抜けるようにして走るのは怖かったがすぐ慣れた。1902 年にフランスが紅河に架けたロンビエン橋（1700m）に行った。ハノイ空爆で一部が破壊されたが修復して、今は鉄道とバイクと歩行者が通る。列車は早朝と夜しか通らないから、観光客や花嫁花婿が線路に入って記念写真を撮っていた。

別の週末にはチウさんの故郷に誘われて夜行バスでタインホアへ行った。ハノイから 150 キロ、バスで 4 時間。友だちもいっしょだったので 8 人の旅だった。彼の家族と合わせて 15 人ぐらいで土間に座って、鍋を囲んだ。ゆで卵の殻を割ったら孵化寸前の中身だった。驚いたが食べた。何でも食べ、何でも飲み、カラオケに行って踊り、男 3 人でベッドに寝る。

つき合うことだけが私の感謝の表現だ。

最後の週末、12 月 24 日の午後、Nhung 先生の小さなきれいなアパートに招待された。彼女はパリで暮らす私の娘と同じ年だ。旧市街に近い静かな住宅地だった。疲れていたのでベッドで少し休ませてもらってから、近くの大きな池の周りを散歩した。彼女は「先生はなんでいつも笑顔なんですか。若いときに悪いことをしたからかもしれませんね」と言った。私は少しだけ知っている親鸞の話をした。そして私の娘が先生に逆らったことがきっかけで反抗期に入ったことを話したら、彼女も自分のささやかないくつもの抵抗の物語を話した。夕食をごちそうになり、お土産にお米をもらい、タクシーで帰った。

学生たちの多くは群馬と新潟に技能実習生としてやってくる。まだ縁は続く。